
魔法先生ネギま！～トランスって懂れるよね～

しもべ妖精

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜トランスって憧れるよね〜

【Nコード】

N4460Q

【作者名】

しもべ妖精

【あらすじ】

のんびりのんびり過ごしていた少年が大天使ミカちゃんのドジにより殺され、特典を1つ与えられて『魔法先生ネギま！』の世界に転生させたてるお話。少年は新たな生をどう過ごすのか？

——あんまり文才ないかもですが気にしないでいただくと幸いです。

プロローグ

どうも皆さん。突然ですいませんが、俺

死んでしまったようです。なぜ分かるかと言つと、

「すみません！！わたしのドジですっかりあなたを殺してしまいました！！」

どこか分からない白い空間で羽を生やした少女が土下座して暴露してるからです。

事の次第は少し前、

く回想く

とある休日。俺がいつもの通りなにをするわけでもなく町を散策していたとき。

あつ、ちなみに俺、趣味散歩、好きなことは睡眠、特技はぼーっとしたまま1日を過ごせること

なんていうまったり人間です。それからちょこつとだけケンカが強かったりするだけの

一般人です。ホントだよ？

それでそんな俺が町に繰り出したわけだ。

「あ~~~~、日差しが、あたたかい。」

本日快晴。気温湿度共に良好。いい散歩日和だなんて思っていたわけですよ。

でもね？さすがに目の前で子供がボールを追いかけて車道に飛び出

した行くのを目にしてみましたら、

気にせずには居られないでしょ？

「しかも、車来てるよ・・・」

ここでお約束と言わんばかりに子供に接近する車があるわけですよ。これがご都合主義か・・・。

なんて現実逃避をしてみる。とは言ってもまだまだ子供と車の距離はそれなりにある。

ちよつと急げば間に合う。何て思いつつ、

「ほら坊主。車来っからあぶねえぞ。」

「ほえ？」

ああ、子供は呑気でいいなあ。何て思いつつ子供を抱き上げ歩道に降ろす。

そしてしゃがみ込み目線を合わせ、軽い説教。

「車道に飛び出しちゃいけないってママに教わらなかったか？」

「えっと、おそわった！」

「なら、守らないといけ・・・おろ？」

言葉の途中でなぜか後ろに引かれたような気がした。たいした力で

もなかったので普段なら

大丈夫なレベルだったが、この時は子供の相手をして気を抜いていたようだ。後ろに倒れそうになる。

たたらを踏み何とか耐え、一息。そこに響くクラクション。急に時間が引き延ばされた感覚に

陥り、冷静に自分の状況を確認。

Q、自分はさっきまで何処に居た？

A、車道よりの歩道。

Q、その後どうなった？

A、後ろに引かれ、たたらを踏み後退。

Q、そして今何処に居る？

A、・・・・・・・・車道。

・・・・・・・・ジーザス。

そこで意識が途切れ、目を覚ましたらさっきの状況だったわけだ。

〈回想終了〉

で、さっきの状況なんだが。

「えーっと、一先ず顔を上げてもらっていいですか？」

「うえ？ふあ、ふあい！」

幼女がビクツと震え、恐る恐る顔を上げる。

「・・・どうしてだろう、沸々と罪悪感が・・・まるで俺が虐めてるみたいなんだが。」

「そ、そんなにビビらないでくれ。なんだかいたたまれない。」

「す、すみません!!」

「あゝ、別に怒ってないから、一先ず説明してくれる？」

「ふあ、ふあい。えっと、ですね。実はわたし、天使なんです!!」

「うん、大体見れば分かるかな？」

「えっ?! えっと、でも、あの、ただの、天使じゃなくて、わたし、ミカエルって言うんです!」

「ミカエルって、大天使ミカエルのミカエル?」

見た目幼女からはまったく想像できないくらいの上位天使なんだが・
・・。

「はい! 気軽にミカって呼んで下さい!」

・・・大天使をあだ名で呼ぶ日が来るとは思わなかった。

「それで、ミカちゃん? 一応俺の死んだ状況は分かるんだけど、なんで君のせいなのかな?」

「えっと、それは〜。」

「それは?」

「わたしが掃除をしていたときにすっかりあなたの人形を落としてこわしてしまっただです。」

「人形? この際なぜ俺の人形があるのかは聞かないけど、人形くらいで・・・。」

「ちがうんです! えっと、その人形は最高神、つまりゼウス様が管理している人形で、

下界、つまりあなたの世界の人々の命を司っているんです。」

「それじゃあつまり、人の数だけ人形があつてその人形が壊れるとその人も死ぬ、

つてことでいいのかな？」

「その通りです。本来なら自然に劣化するか、運命に従つて壊れるかしかないんですが、

でも、わたしの、わたしのせいでええええー！！」

いきなり自責の念に囚われたのか泣きじゃくるミカちゃん。ああ、幼女が・・・。

しかし、ここで俺は奥義を発動します。その名も『ナデポ』

そして、ミカちゃんの頭に手を置き、撫でり撫でり。

「ふえ、ふあ、ふにゅ〜。」

撫でるごとに落ち着き、次第にとろけるミカちゃん。ふつ、どんなヤツでも骨抜きだぜ。

「とりあえず、言っておくけど。別に恨んでないよ。特に未練はなかったし。」

「ふにゅううう。」

はい、聞いてませんね。分かります。話が進まないのです、撫でるのはここまでです。

・・・そんな残念そうな顔しないでください。罪悪感に襲われますから。

「ゴホン。それで俺はこれからどうなるのかな？」

「そうでした！あなたにはこれから転生してもらいます！」

なんだかお決まりのパターンだなあ。

「転生ねえ。何処に行くの？」

「えっと確か・・・・・・・・・・。」

考えるそぶりをして、人差し指をこめかみにグリグリしてます。なんだか微笑ましいですね。

「・・・そうです！『魔法先生ネギま！』の世界です！」

『魔法先生ネギま！』確か、魔法使いの子供先生が四苦八苦する話でしたか？週刊マ○ジンの。

俺は基本ジャン○系しか見てなかったからなあ。漫画オタクの友達に聞いた情報だ。

「それで、なんと！特典も付くんですよ！」

「特典？」

「はいです。まず、デフォルトとして不老が付きます！いつ成長が

止まるか分かりませんが・・・。」

「不老？不死ではないんですか？」

「はい、すいませんが不死は付けられないんですよ。わたしの力では不老が限界で・・・。」

「別に不死が欲しいわけじゃないから全然いいよ。」

「そう言ってもらえると助かります。」

なぜか感謝するようにペコペコ頭を下げるミカちゃん。それにしても特典か。

「それで特典なんですが！1つだけあなたの望む力が与えられます！よっぽど規格外の

力じゃない限り問題ないです！」

「特典ねえ・・・・・・・・。あっ！じゃあ、トランス能力は？」

「それって、ナノマシンを使ってやるやつですか？」

「そつ。できるかな？」

「ちょっと待ってくださいね・・・・・・・・。あ、大丈夫みたいです。」

その代わり生まれが少し特殊になってしまつかもです。それでもいいですか？」

「そのくらいならいいかな。じゃ、それをお願い。」

「はいです！それでは転生させますので準備をお願いします！」

「・・・準備って？」

「？えっと、身構えるとか？」

「・・・あまりいい予感がしませんよお。」

「では、逝きます！！！」

そう、ミカちゃんが叫んだあと、地面に穴が開き落ちる俺。

「字がちがああああうう・・・。」

叫びを上げた後、俺の意識は暗転しました。

無事着けるか不安になりました。

1話　なんで培養液って息できるんだろ？（前書き）

遅くなりました。いつでもパソコンを使えるわけではないので大目に見てくれると幸いです。

1話　なんで培養液って息できるんだろ？

ミカちゃんに落とされてからどのくらいたったかな？意識無いと時間感覚が

はつきりしないからなあ。それにしてもこの浮遊感はいつたい・・・。
疑問に思い、目を開けると

視界一杯に広がる緑の液体。

「ふぼおおおー！ばんびゃこびゃあー！！！！！！」

驚きのあまり声を出しますが、口から出るのは泡ばかり。

液体に浸かっている割に息は苦しくありません。少し冷静になってみると、どうやらカプセルの

中のようなです。いやはや、特殊な生まれとはいえ少し特殊すぎやしませんかね？

「おや？お目覚めのようすな。と言っても、こちらの言うことは理解できないでしょうが・・・。」

「（いえ、普通に理解できますよ？俺、転生者ツスから。）」

「くふふふ。目が覚めたということは、一先ず実験は成功ですね。ならば、これからの

訓練スケジュールを組まなければいけませんね。」

男は気味悪く笑いながら部屋を後にします。

ん〜、これからどうしよう……。訓練って何かなあ。もう逃げちやおうかなあ。

でも今のままじゃすぐ捕まっちゃうよなあ。トランスの訓練してか
らでも遅くないかな。

などと考えつつ、徐々にやってきた睡魔に身を委ねた。

それからは何だかんだで訓練の毎日。戦ったり、戦ったり、戦った
りした。

最初は如何せん体が小さくて戸惑った。中身は青年、見た目は幼児。
4、5歳くらいかな？

その割りに力も強いし、反射神経も上々だ。最初はなんでかあ、と
か思っていたが、正体が判明した。

どうやら俺はホムンクルスらしい。もっとも某鋼みたいに真っ赤な
石など使っていない。

材料と設備と技術があれば作れるらしい。作る段階でナノマシンに
適合するように

調整したとか何とか。その調整段階である程度脳もいじったらしい。訓練相手とか

殺っちゃってもいまいち罪悪感と言つか嫌悪感が無いんでありますよ。事務的にやれるっていうか？

それにしてもナノマシンってすごいね。手が剣になったり、盾になったり、

憧れのトランス能力が我が手に！なんて感じですよ。あと、魔法なんてもんも覚えた。

身体強化とか、魔法の射手とか。体がピカーって光ったり、手からバシューって出たりした。

でも休む間もないのが難儀かなあ。調整カプセルの中で眠り、そして起きる。起きたら訓練。

そんなのが1年も続けばマンネリ化してくる。1年間も見た目幼児の子に訓練と言う名の

殺しをさせてきたところを見るとここの研究者たちは人道的ではない。

もつとも俺を作り出した時点でそんなもんはサラサラない。

「そろそろ、潮時かなあ。」

なんてことを戦いながら呟いてみたり。ちなみに今回の相手はキメ

ラ的なヤツ。

頭が3つある獣。パツと見ケルベロスだが、よく見ると違う。犬っぽい頭が2つに

ライオンみたいな頭が1つ。猫科が混ざっては地獄の番犬は語れないだろう。

でも、訓練相手なだけあって早いし、力強い。避けまくってるから壁や地面がベコベコに凹んでる。

こんなでも次の日には元通りになってるからびっくりだ。研究所七不思議の1つだね。

いい加減飽きたし、終わりにしようか。

「・・・変身^{トランス}、ブレード。」

手を剣に変え、迫ってくる獣を切る。瞬時に3回振り3つの首を落とす。獣から血が噴出し、

ゆっくり地面に倒れる。

『・・・ご苦労。今日は終わりだ。』

「・・・了解。」

スピーカーから終わりお告げられ、部屋お後にする。剣はすでに普通の手に戻っていた。

ある日の朝俺はいつものように起きた。目を開ければ見慣れた緑の視界。いい加減見飽きた。

「今日で終わりだな。」

こんなトコに居ても意味は無い。俺はここを潰す。そう思い、手を剣にしてカプセルを切った。

途端に鳴り響く警報。俺は慌てずゆっくりとカプセルから出た。次第に近づいてくる足音。

扉が開くと同時になだれ込んでくる魔法使いども。

「貴様！動くな！！人形の分際で。」

全員俺に杖を向けてくるが、遅い。

「変身、スライサー。」

髪を刃に変化させ、杖を向けてきたやつらの横薙ぎにする。前方に居たやつらは

見事に腰から半分になった。後ろのやつらは助かったみたいだ。

「こつ言う時は即座に撃つことをお勧めするよ。」

「くっ！風の精霊11人、縛鎖となりて、敵を捕まえろ！魔法の射手、戒めの風矢！！」

1人がこちらに魔法の射手を放ってくる。

カントウス・ベラークス
「戦いの歌」

身体強化を使い、瞬動で後ろに回る。魔法の射手は何も無いところに当たって消えた。

「遅い、死ね。」

後方にいたやつらも同じように死んでもらった。

「さて、大掃除と行きますか。」

血だまりの部屋を後にして、研究所内にいるすべてのやつらの駆逐に向かった。

まあ、それからは単純だ。ただ向かってくる魔法使いどもを殺して行けばいいだけ。

あるものは首を切られ、あるものは頭を潰され、俺が通った通路は赤く汚れていた。

あらかた掃除を終え、所長室らしき所に着く。

問答無用で扉を蹴破り中へ入る。そこには俺を作った張本人がなにくわぬ顔で座っていた。

「・・・逃げなかったのか？」

「逃げる？なぜ逃げねばならないのです？こんなにも立派な殺人マシンができたと言うのに。」

「何を言っている？」

「研究所にいるものすべてを殺す。これが貴方の最終訓練です。」

「俺がこうすることも予想通りってわけか。」

そう問う俺にヤツはニッコリ微笑み。

「その通り。そして私を殺せば訓練終了です。私が死ねばこの研究所は消滅しますしね。」

「そうか。変身^{トランス}、刀。」

髪を一振りの刀に変化させ、ヤツの首に宛がう。

「最後に1つだけ。」

「・・・言ってみろ。」

「貴方は必ず戦場に行きます。それが殺人マシンとしての運命です。」

「・・・そうかもしれないな。」

「では、あの世があるか分かりませんが、ゆっくり見物させてもら

いましょう。」

「悪趣味なヤツだ。」

そう言っつて、俺はヤツの首を跳ねた。同時に研究所の消滅プログラムが作動した。

そして、研究所から離れたところで研究所は魔力放流により跡形もなく消滅した。

そして俺は行き場を失ってしまった。

2話 出会った当初から破天荒なヤツです。(前書き)

遅くなりまして申し訳ない。

口調とかが若干不安ですが、大目に目見ていただきたい。

2話 出会った当初から破天荒なヤツです。

研究所を出てから3日目。俺は今窮地に立たされていた。研究所での訓練からちよつと位の

ピンチなら問題なく対処できるが、今のピンチばかりはどうしようもない。そのピンチとは

ぐう~~~~。。。

ひたすら腹が減っていた。

研究所を潰した日以降、まともなものを口にしていなかった。何せ周りには森ばかり。

森なら動物くらいはいると思ったが、俺の醸し出す気配に本能的に避けられているようで

まったく姿を見せない。徐々に人の気配が強くなってきているから人里は割と近くなんだと思う。

でも、さすがに限界が近いかもしれない。

「・・・ヤバイな。ちょっと視界が霞んできたんだけど。」

心なしか足元がフラフラしてきている。

「これ、やば・・・。」

そして、俺は今と前世含めて初めて空腹で意識を失った。

ふと、俺は日の光に当てられて目を覚ます。視界に入るのは見知らぬ天井。

「・・・知らない天井だ。」

決まり文句なので言わないといけない気がした。

「お、やっと起きたか？」

声が聞こえたのでそちらの方を向くと、なにやら赤毛の少年がこちらを覗きこんでいた。

「えっと、君は？」

「ん？俺か？俺はナギ。ナギ・スプリングフィールドだ！お前は？」

「俺は………。」

名乗りをあげそうになって気付く。俺、名前無いじゃん。やッベー。名前無いですとか、いえねーよ。

えっと、トランス？いやいや、名無し？いやいやいや！……………あっ！？

「俺は……ナノだ。」

「そうか！ナノか！よろしくな！！」

「ああ、よろしくナギ。それで？ここはどこなんだ？」

「ここは俺んちだ。正確にはちょっと違うけど俺んちだ！倒れてたお前を連れてきたってわけだ。」

「そうなのか？それは助かった。」

本当にありがたい。さすがの俺でも餓死は勘弁してもらいたい。改

めて空腹のことを考えると、

気が緩み腹が鳴ってしまう。

「お？何だお前、腹減ってんのか？」

「めんばくないがその通りだ。3日くらい何も食べてないんだ。」

「はは！そりゃ、腹も減るな！丁度肉があるけど食うか？」

そう言つてナギは窓の向こうに視線を送る。俺も気になり、そちらに目を向けると、

「・・・イノシシかよ。」

それなりのかさのイノシシが横たわっていた。

「さっきつ獲ったばかりだから新鮮だぜ？」

確かに新鮮かもしれないが……。それにしても、ナギは見たところ俺と同じくらいの年な気がする。

それなのにイノシシを仕留められるということは、

「なあ、ナギ。」

「ん、なんだ？」

「お前魔法使いか？」

「おう。そうだぜ。」

「……あれ？魔法って隠すもんなんじゃないけ？こんなに簡単に答えちゃっていいの？」

「あゝ、聞いってなんだが。魔法は隠すもんなんじゃないのか？」

「あ？……ああ！そういえばそうだったなあ。」

なんかまったく慌ててないなあ。

「ま、今更いいじゃんよ？それに聞いてくるって事はナノも魔法使いなんだろう？」

「まあ、厳密には違うけどまあ、そうだな。」

「なら問題ねえって！」

「……ナギと会ってほんの少ししか経ってないけど、ナギの性格が分かってきた気がする。」

「それで、イノシシ食うか？」

「じゃあ、もらおうかな？」

「おっしゃ！じゃあ、外行こうぜ、外！さすがに家の中じゃ食べねえからな！」

「そうだな。そうするよ。」

確かにその通りなのでナギと一緒に外に出た。

そして、食事の準備をするんだが・・・。

「えーっと、ナギ？なにしてるんだ？」

「ん？何って、イノシシを丸焼きにすんだよ。」

当たり前だろ？と言わんばかりに不思議がつている。イヤイヤ、いくらなんでも男の料理過ぎるだろ！

「よし、落ち着け。まず焼くのはいいとして、切らないのか？それに毛だって・・・。」

「ええー、めんどくせーじゃんよ？」

「あー、うん。そうなんだけどね？ナギ、ちょっと離れてくれるかな？」

「あ？いいけどよ。」

そう言つて、ナギをイノシシから離れさせる。

さて、これからイノシシを切るんだが、変身^{トランス}をナギに見せていいのかな？

でも、ナギなら問題ない気がする。

「しゃくないな。変身、スライサー。」

「うおっ！？なんだあ？」

「後で説明するよ。よつと。」

軽くイノシシを空中に放り投げ、スライサーで毛を刈り取る。

「おお！！丸裸になった！？」

「・・・その表現はどうかと思うけど。それっ。」

ナギの発言に苦笑いしながら、イノシシを解体していく。もちろん解体した肉は地面に置かず、

別に髪で変身した大きな手で持っている。まあ、手の中が若干グロテスクな感じに

なっただが気にしないでおこつ。

「で、解体したけどどのくらい食うんだ？」

「全部だ！！」

「・・・了解。」

満面の笑みで言われたらツツコム気が失せてしまった。

そしてそこらへんにある枝をナギに集めてもらい、俺はそこらの岩を切り鉄板代わりにする。

「それじゃあナギ。火、起こしてくれ。」

「おしゃあ！！プラクテ・ビギナル 火よ灯れ《アールデスカット》
《！！！！》」

そう唱えたナギの魔法が一瞬で集めた枝を墨に変える。

「・・・・・・・・・・。」

「なんだあ？つかねえじゃねえか。」

「つかねえじゃねえか、じゃねえよ！？強すぎるんだよ！！一瞬で墨になってんじゃねえか！？」

「いや〜〜、魔力制御みたいにチマチマやつは苦手なんだ。」

いや、苦手とかそんなレベルの話ではない気がする。初心者呪文で人が殺せるぞ？

結局その後、枝を集め直し、火は俺がつけた。

若干トラブルがあつたが、無事に飯にあり付けた。

「なあ、さっきのどうやったんだ？髪がこう、ピカーって。」

塩と胡椒で味付けしただけのイノシシ肉を食べながら、ナギがそんなことを聞いてきた。

「あれな。あれは変身^{トランス}つてやつかな。」

「トランス？」

「そうだ。俺は諸事情で体に魔道ナノマシンが居るんだ。」

「ナノマシン？ナノマシンってなんだ？」

「簡単に説明すると、目に見えないくらいの機械だな。それを使って体の分子配列を変えて

いろんなものに変えることができるんだ。俺の体で生成されてるか
ら無くなることもないし。」

「????」

どうやらまったく理解していないらしい。おつむが足りないようだ。

「よくわかんねえけど、とにかくくすげえってことだな!!」

「うん、それでいいんじゃない？」

「それで、ナノはこれからどうするんだ？行くト」あんのか？」

「そういえば、行く宛てもないなあ。」

「じゃあさ、俺んちに住めよ！」

「・・・いいのか？」

「おう！その代わりに俺と修行してくれ！俺は強くなりてえからな
！！」

「そのぐらいでよかったらいくらでも付き合っよ。これからよろしく頼む。」

「おう！！」

そう言っでナギはニカツと笑った。

これからどう過ごすか結構楽しみになってきた。

2話 出会った当初から破天荒なヤツです。(後書き)

後半、展開が早い気がして申し訳ない。文才無いものでして・・・。

3話 後先考えないのは慣れたものです。

ナギと出会い、それなりの年月がたった。

修行したり、修行したり、修行したりした。

ナギのトコに住むようになってから少しして、ナギの保護者的なじいさんに会った。

何でもメルディアナ魔法学校の校長をしているらしい。そしてなぜか、ナギが入学すると同時に

俺まで入ることになってしまった。あまり得意ではないけどある程度なら魔法も使える。

師匠がいらないから魔法の上達はいまいちなのだ。戦闘の方はナギとバトって上達した。

ナギも師匠はいないはずなんだが、魔法もメキメキ成長している。

あんちょこ見ながら呪文詠唱してるんだが、如何せん込める魔力がハンパ無いので

威力が尋常ではない。何度死ぬかと思ったか……。ナギの破天荒ぶりには溜息が出る。

魔法学校に入学してからそれは変わることなく。

イタズラ、ムカつく教師への嫌がらせ、罠の設置、授業をサボるなんて当たり前。

そしてことあるごとに、

「ナノ！面白いイタズラ考えたんだ！！手伝ってくれ！」

とか、

「ナノ！あのクソ教師に嫌がらせするから手伝ってくれ！」

そんな感じにことあるごとに俺を誘うので俺とナギはセットで問題児認定されてしまったわけだ。

かく言う俺もナギの提案を断らずに手伝ってやったのだから弁明の余地は無いと思う。

そして、今日も今日とて

「コラアアア！！！！待たんかあああ！！！！？」

「よくも私達職員の机にイタズラしおつたなあ！！！！？」

イタズラ三昧である。ちなみに今日したイタズラは魔法学校の職員

全員（男性教諭限定）の

机に細工をして放課後の職員会議の最中に爆発するようにした。もちろん女性教諭の周りには

設置型の結界を張り、まったくの無傷。

そして本来なら証拠が無いので追いかけるいわれはないのだが、

「ああ、くつそー！もう追いついてきやがった！？」

「まったくめんどくさいなあ。あの時ナギが大爆笑しなければ言い逃れできたのに。」

「仕方ねえだろ！？爆発したときの先公の顔！ぷっ！思い出しただけで笑えてきたー！」

「はあ・・・。」

その時に隠れて様子を伺ってたのだが、爆発したときの教師の顔が傑作だったらしく、

大声を上げて大爆笑したのが原因だ。当然の様に見つかり、現在逃走中なわけだが、

「――魔法の射手 戒めの風矢！」

「ちっ！魔法使ってきやがった！」

「今回は結構マジみたいだね。魔法の射手 連弾・闇の9矢！」

俺達に向かってきた魔法の射手を同数の魔法の射手で相殺する。

最初は簡単に逃げられたのだが、最近は教師達の錬度が上がってきている。

それでも逃げられないわけではないが、めんどくさい事には変わらない。

「——目醒め現れよ 燃え出づる火蜥蜴 火を以てして 敵を覆わん 紫炎の捕らえ手!!」

「——目醒め現れよ 浪立つる水妖 水床に 敵を沈めん 流水の縛り手!!」

「——目醒め現れよ 響き渡る雷獣 雷鳴の下に 敵を捕えん 雷雲の掴み手!!」

「うおっ!?! 奴らマジみたいだな!」

「たかが子供2人に気合入れすぎでしょ……。」

「はっ! 上等! ーおらああ! ー白き雷!」

「気合で無詠唱ってどんだけだよ。紅き焰。」

俺達に向かってきた捕縛系の魔法は俺とナギの無詠唱の中級魔法で掻き消された。

「よっしゃ! ナノ、今のうちに!」

「了解。んん・・・、ほい。扉^{ゲート}。」

土埃で視界が悪い間に影を使った扉^{ゲート}で転移をする。多少時間がかかるが、

そんなに遠くない場所なら俺は扉^{ゲート}が使える。

そして、俺達は今日もまんまと逃げ切れたわけだ。ホント、平和な毎日だよ。

そんな感じで俺たちも10歳になったわけなんだが、さすがにイタズラ回数が限界を迎えたのか、

俺とナギは校長に呼び出しを食らってしまったわけだ。現在進行形で説教を食らっている。

「・・・まったくお主たちと来たら、教室を爆破させたり、教員室

を爆破させたり、

教員を落とし穴に落したり、気に入らない教員をボコボコにした
り。度が過ぎるぞ。」

「仕方ねえじゃん。ただ授業受けるのも退屈だしよお。なあ?」

「・・・そこで俺に振るなよ。まあ、同感だけど・・・。」

「まったく反省しておらんようじゃの。これではさすがのワシでも
かばいきれんぞ。」

これ以上続けるのなら最悪、退学も考えねばならん。」

ああ、退学かあ。メルディアナ史上初の退学者かあ・・・。めんど
うだなあ。

「はっ!退学?上等だ!!こんな学校、こっちからやめてやるぜ!
!」

「なっ!?!なにを言っておるんじゃ!?!」

「今日で俺は学校を辞める!ナノ、行こうぜ!」

そう言つて、さっさと扉に向かうナギ。てか、無条件で俺も一緒な
んですね、分かります。

「あゝ・・・、そう言う事らしいんで、失礼します。」

「こら!待たんか!?!」

引き止める校長の声を尻目に俺とナギは校長室を後にした。

「で、これからどうすんだ？」

のしのしと行き先も告げずに前を歩くナギに声をかける。

「一先ず、世界を回ってみる！」

「世界ねえ……。最初は何処に行くんだ？」

「ん〜、確かジジイの知り合いが日本にいたか言ってたな……」

「それなら日本か？」

「そうだな。まずは日本に行くぜ!!」

「了解。ちよつと時間はかかるが、小刻みな転移で行くか。金もねえしな。」

「よっしゃあ!!そうと決まれば早速準備だ!!!!」

そう言っでナギはテンション最大で走っていった。

「・・・ホント、ナギといると退屈しないよ。」

テンション最大のナギに苦笑いしながら、小走りでナギの後を追った。

3話 後先考えないのは慣れたものです。（後書き）

なんだか、主人公のキャラがダルイ系になってしまいました。

作者も基本ダルイ系なのでもうこのまま行っちゃいたいと思います。

雷雲の掴み手はオリジナルです。同系統の魔法を参考に詠唱を考えました。

時々そんな感じのが出てくるかもです。

では、次話もよろしくお願いします。

4話 大きすぎる学園ってどうなんだろうか？（前書き）

いやはや、遅くなって申し訳ない。少しばかりpcゲームに夢中になってしまつて・・・。

すっかりクリアもしたからもう大丈夫！

温かい目で見ていただきたい。

4話 大きすぎる学園ってどうなんだろう？

ナギが日本に行く決めてから、すぐに準備をして日本に向けて転移を開始する。

まだまだ未熟なので、数十キロ転移するので精一杯なので数日かけて日本に向かった。

そして、ようやく麻帆良学園に着いたわけなんだが、

「……………でかすぎるだろ。」

「うひょ〜〜！！すげ〜〜！！」

とんでもなくデカイのだ。学園都市とは聞いていたが、さすがにここまでとなると予想外だ。

果たして、学園のすべてを知っている人間は何人いるのだろうか？

「で、どうすんだこれから。校長の知り合いの居る場所分かるのか？」

「いや、分かんね。じじいの知り合いってんだから結構強いヤツだと思う。」

「…………結局何が言いたい？」

「お前の探知で探してくれ！俺、そういう細かいの苦手だし！」

そう言つて胸を張るナギ。決して威張ることでは無い。

「・・・仕方ない。お前の雑な探知に任せたら何処に行くかわかったもんじゃない。」

ため息をついて強力な魔力を探しつつ、歩みを開始した。

歩みを開始してから数十分後。俺達は麻帆良女子中等部前に居た。

「・・・さすがに居心地が悪すぎる。」

ここに来るまでに多少視線は感じたもののそれほどもなかったの
で気にしないでいた。

もつともこちらから言わせてもらえばこの学生の方が気になる存
在であつた。

なぜなら大半の者が何かしらの仮装をしていたからである。

・・・ナギはそれを見てテンションをあげていたが。

そのナギは今現在周囲（すべて女子）から浴びせられる視線を気に
した様子も無く、

キャッキヤとはしゃぎ回っている。本当に肝が太いというか鈍感と
いうか・・・。

「ナギ、さつさと行くぞ。」

「おう!!」

ホントに、何が楽しんだか・・・。

様々な意味合いの視線を浴びせられつつ、何とか強力な魔力の反応がある学園長室までたどり着いた。

周囲の視線によりライフポイントが0な俺に対して、ナギはとことん元気だ。

その元気を分けて欲しいよ。そんなことを考えつつ、俺は扉をノックする。

『入っていいぞい。』

「失礼します。」

しっかり挨拶をしてから中に入る。ナギはキョロキョロとしたまま無言で入ったが。

「む、誰じゃねお主たちは？確か誰とも会った約束は無かったはずじやがの。」

立派な髭を蓄え、なんだか人類としてはありえないくらい長い後頭部をした老人が

こちらを警戒している。

・・・校長の知り合いは妖怪なのだろうか？少なくともパツと見人には見えない。

「・・・アポなしで申し訳ない。私はナン「爺さんがうちのじじいと知り合いのヤツか？」・・・。」

俺が丁寧に挨拶をしようとしたところでナギの発言にかぶられた。

「ふむ、もしか君らがナギ君とナノ君かの？」

「俺達を知ってんのか？」

「当たり前じゃないじゃの。先日、メルディアナのほうから連絡があったの。」

近々ナギという少年とナノという少年がそちらに行くかもしれないから

よろしく頼む、と言ったわい。」

「どうやら遠見の魔法で見られてたみたいだな。」

「げえ、あのじじい覗き見かよ!？」

あらかじめ連絡が行っていたようで少し安心した。

「それで、ワシに何か用かの？」

「いんや別に。」

「ふぉ？」

「別に爺さんに用なんかねえよ。俺達はじじいの知り合いが日本に居るって言うから

見に来ただけだよ。にしてもさすがはじじいだけ。まさか人外の知り合いが居るなんてなあ！」

「ふぉ！？」

「・・・ナギ、一応あんなりしてても人間だぞ・・・・・・・・きつと。」

「ふぉお！！！？」

「げえ！そうなのか！？へえ、日本ってすげえ国だなあ！」

「・・・さすがにあの爺さんを基準に日本を決めるのは失礼だと思う。」

「・・・うう、さすがにひどいじゃろ・・・。」

「いや、申し訳ない。つい本音が出てしまったようで・・・。」

「もうええぞい、そんなに畏まらんで。」

「あつ、そすか？では遠慮なく。知ってると思うが、俺はナノ。で、こつちがナギな？」

「おう！ナギ・スプリングフィールドだ！」

「・・・そう早変わりされるのもなんかのお。まあええわい。ワシは近衛 近右衛門。」

関東魔法協会の理事をしておる。」

「へえ、結構偉いんだな！」

「伊達に後頭部は長くないというわけか・・・。」

「それは関係ないじやろ・・・。」

感心するナギにしみじみと頷く俺、そしてさめざめと泣く爺さん。若干カオスになった。

「それで、どのくらい滞在するののか？知らん仲でもないし、宿泊場所くらいは提供するぞい。」

「だってよ。どうする、ナギ？」

「もうちっとこの学園見て回ろっぜ！なんか面白そうなことやって

るしよ！」

「そつえばそうだな。爺さん、麻帆良は今なんかあるのか？ここに来るまでに色々見たが。」

「ふむ。実はもうすぐ学園祭での？皆、その準備をしておる訳じゃ。」

なるほど。さすがに学園都市となると規模が違うな。しかし祭となると、

「学園祭！！？すっげえ面白そうだな！！」

テンションが上がるやつが出てくるわけだ。

「まだ、準備中じゃからの。少しじゃが、出店がやっておるはずじゃ。」

「おお！！よつしゃああ！早速行くぜえ！！」

「あつ、おい！」

俺の声も聞かずに全速力で学園長室を出て行ったナギ。

「・・・ということらしい。宿泊先を頼む。」

「・・・うむ。話は付けておくわい。」

そう言つて宿泊先のメモを受け取り、ささっと走って行ってしまったナギの後を追うために

学園長室を後にした。まったく、いつでもエンジン全開なヤツだよ、ホントに・・・。

5話 これは腹ごなしのレベルなのか？

先走って走っていったナギはもうすでに準備期間でも開いていた屋台で食べ物を漁っていた。

結局、準備期間中はナギはひたすら食べ歩き、俺はそれに付き合っていた。

正直な話、学園祭は久しぶりなので多少は俺もテンションが高かったかもしれない。

そしてとうとう待ちに待った学園祭が始まるうとしていた。

『只今より、第53回麻帆良祭を開催します！！』

ワーーーー！！！！！！

放送が入り、周囲の生徒や一般客の人たちが歓声を上げる。ナギはというと、

「おっしやああ！！！！盛り上がってきたぜえ！！！」

「・・・お前は準備期間から盛り上がってただろうが。」

テンションが振り切っていた。正直ついていけません。

「なんだよナノ！？ノリ悪いぞ！！」

「元気すぎだ。お前は。」

「気にすんなって！！おっ！何だあれ！？面白そうだな！！行くぞナノ！」

そう言っ返事も聞かずに目的のところ走っていった。

「まったく、ナギにブレーキは無いのか・・・。」

さっきより肩を落としつつ、ナギの後を追った。

結局、昼を少し過ぎるくらいまでナギに付き合っ羽目になり、初日からヘトヘトになった。

そして今現在、俺とナギはオープンカフェ的なところで昼飯を食べている。

「くっそー！！なんで俺よりお前の点数の方がよかつたんだよ！？」

「お前は余計なところにバカス力撃ちすぎなんだよ。」

「だってよお・・・。」

拗ねたようにテーブルに突っ伏すナギ。どうやら先ほどのシューティングゲームで

俺より点数が低かったのが気に入らないようだ。

「それにしても、明らかに現代のレベルではありえない機械がわんさかあるが、いいのか？」

まあ、爺さんの話によると麻帆良全体に認識阻害の魔法がかかってるらしいし、問題ないのか？」

「そうなのか？俺は難しいことは分かんねえけどな！」

「威張って言うことじゃねえよ。」

そう突っ込んだ後に、頼んだものが来た。

ナギはオムライスやスパゲッティといったものをこれでもかと頼み。俺はスパゲッティとコーヒーのみ。ナギに足りるのか？といわれたが、逆に食えるのか？

と聞き返したら、笑顔で余裕！！と言われた。いったいどんな胃袋してるんだよ……。

「ふおふえにしふえもふおゝ。ふあんふあ、ふおうふよふおふあらふあふおふあらだふお

ふゝふあふえるふおんふあいふおふあふえゝ。」

「うん、何言ってるのかサッパリ分からんぞ?」

「んぐんぐ、つく。だからあ、もうちょっと体が動かせる無いか
って聞いているだろ?」

「ああ、そう言ってたのね。都合よく、そんなもんあるかねえ。—
応学園祭だしなあ。」

そう言っただで配っていたパンフレットを眺める。ナギは待っている間にどんどん飯を消化していく。

全体をくまなく見ていたところで、気になるものを発見した。

「まほら武道会?」

「武道会!!?」

「うおっ!!? 怖えよ!!」

いきなり反応してきたかと思ったら、目の前にナギの顔があった。
ちなみに目が爛々としていた。

「それより! まほら武道会ってなんだよ!」

「このパンフじゃ詳細は分かんねえけど、場所は書いてあるから行
ってみるか?」

「当たり前だぜ! そうと決まればさっさと食い終わらないとな!」

さつきより5割増しくらいのスピードで残りを食べていくナギ。見ていて汚い。

「ぼっひゃあああ！！！！いふべええ！！！」

すべての料理を食べ終わり、口の中に物が入ったままですから立ち上がり走っていくナギ。

「おーい、金払っていけよ。」

そんな呟きも聞こえるはずも無く。全力全開で走っていくナギ。

「はぁ……。すいません、会計お願いします。」

「はい、ありがとうございます。お会計、4850円になります。」

2人で5000円とか……。まあ金は何か理由を付けて学園長からふんだくってきたから

いいんだけど、気分的に俺の奢りみたいになってあまりいい気分ではないな。

「ありがとうございますあ！」

店員のスマイルに見送られ、俺はナギの後を追った。

「それにしても、ナギのやつ。武道会の会場の場所分かってるのか？」

ふと、そんな疑問が頭をよぎった。

結局ナギは場所が分からず、俺のところに戻ってきて一緒に行くことになった。

割と早く着いた武道会会場はそれなりに人が集まっていた。

「うへえ〜、人がいっぱい居るぜ。」

「・・・なんだかむさ苦しい。」

人はいっぱい居るが、結構な人数がむさ苦しい筋肉隆々としたやつらで、正直キツイ。

周囲の状況にげんなりしながらも、途中で見つけた武道会の詳細が書かれた紙を眺める。

「えっと、何々。一先ず、反則云々だけ覚えておけばいいか・・・。」

「おう！なあ、早く説明してくれよ。」

・・・こいつは自分で読むということをしてないのだろうか？

「刀剣、銃火器などの危険のある武器は禁止。目や金的などの危険箇所への攻撃は禁止。」

試合終了後の相手への攻撃は禁止。主にこんなトコか。細かいのはいくつかあるけど、

ナギがおぼえられそうに無いやつばかりだし、気にしないでいいかな。」

「そうなのか？なら、それだけ覚えとくぜ！」

グツとサムズアップするナギ。少し嫌味を言っているんだが気付いてないのか？

「勝利条件は勝利条件はギブアップ又は相手の気絶。」

もう1つ時間切れ後の人気投票ってのがあるけど、ナギは時間切れにはならないか・・・。」

「おう、KO以外認めないぜ！」

「はぁ・・・。ホント元気なやつだな。ま、頑張れよ。」

「ナノは参加しねえのか？」

「アホか、昼飯食った後に運動なんかしてられるか。」

「そうかあ？いい腹ごなしになると思っただけだなあ。」

「それはお前だけだ。とにかく、俺は出ないからさっさと受付済ませて来い。」

「ちえゝ。まゝ、しゃゝねえか。よっしゃ！じゃゝ、行ってくるぜ！」

そういつてナギは意気揚々と受付の方に行った。

はてさて、いったいどの程度のレベルなんだろうかね。

5話 これは腹ごなしのレベルなのか？（後書き）

つたない文章で申し訳ない。

話が進むにつれて、話が雑になってきているような気もしないでもないですね。

頑張って次話を投稿しますので見ていただけたら幸いです。

6話 レベルが低い？イヤイヤ、お前のレベルが高い。（前書き）

初の連日投稿です。

アイディアが浮かぶとそれなりにいけるんですが、

結構きついですね。

ほぼ毎日更新の方はすごいです。

見習えるように頑張ります。では、お読みいただきたい。

6話 レベルが低い？イヤイヤ、お前のレベルが高い。

受付に行ったナギと別れ、俺は観客席の方に向かった。人は多かったが、そんなのは関係ない。

俺は客席を無視して、客席の上にあるやねに飛び乗り、軽い認識障害を掛ける。

「・・・良くあんなむさ苦しい場所で観戦が出来るな。」

屋根の下を覗きつつ、呟く。

そして開催時間になったらしく、司会と思われる女性が前に出てくる。

『さあ、ついに始めました！まほら武道会！学園生徒、外部の人問わず参加できる本大会。』

多くの方々が参加を表明してくださいました！なので、まずは予選を行いたいと思います！

選手の方々には受付の際、くじをお渡ししております。全部で4つのブロックに分かれてもらい、

その中でバトルロイヤルをしていただきます。そして、全4ブロック中、上位2名の選手が

決勝トーナメントに進むことが出来ます！それでは、各選手は指定の舞台にお上がりください。』

その声と共にかなりの選手が4つの舞台に上がっていく。筋肉隆々のヤツや、道着を着て、

あからさまな武術家オーラを出しているヤツもいた。その中でも異質なヤツが、

言わずと知れたウチのナギである。まだ10歳なので周囲のやつらより全然小さい。

それにローブなんて身に纏っているから目立ちまくりだ。同ブロックの奴等は舐めきってるし。

『それでは各ブロック準備はいいですか？それでは予選………はじめ！！』

司会の合図と共に各ブロックで戦闘が始まる。パツと見、少しは使えそうなやつらが居るが、

あくまで一般人レベル。ナギと比べると月とスッポンだ。その証拠に、

「しゃらあああ！！」

ナギのブロックでは人が宙を舞っている。型もあつたもんじゃないが、なんら問題ない。

アホみたいな魔力で身体強化してるんだから当たり前だが……。

「くっ、やるなガキ！食らえ、飛来拳！！」

選手の1人が氣弾をナギに放った。ネーミングセンスは置いといて、氣を使えるってことは

それなりに修行をしたんだろう。だが相手が悪い。

「おお！やるな！今度はこっちから行くぜ！」

相手の氣弾を軽く避け、瞬動で後ろに回り、思いっきり殴る。相手は反応できていなかったたので

場外まで吹っ飛び、柱に当たって氣絶する。そこでどうやらナギのブロックは上位2名が

決まったんだろう。1人はナギ。もう1人は運よく残った名も無き武道家のようだ。

彼は運が良かったんだろう。

『さあ、どうやら各ブロック選手が出揃ったようです。ではこれから決勝トーナメントの

組み合わせを決めますので、10分程の休憩を挟みます。選手の皆様はこちらにお集まりください。』

選手達がそろそろ司会のところが集まっていく。途中、ナギと目が合い親指をグッと立ててきたので

軽く手を振ってやった。傍から見れば誰も居ないところに親指を立てる変な人に見えるだろう。

10分間の休憩も終わり、トーナメント表が表示される。無駄にハイスペックな学園都市だ。

認識障害の結界が無ければおそらく大騒ぎだろう。

まあそれは置いて、ナギはどうやら1試合目のようだ。相手は犬塚 犬というらしい。

まあ確かに見た目が犬っぽい。ブルドックだが……。きっと、女にモテないのだろう。

10歳とはいえすでに微イケメンのナギに嫉妬しているように見える。

『さあ、それでは決勝トーナメント第1試合を始めます！選手の入場です！』

まずはナギ・スプリングフィールド選手。なんとまだ10歳だとい

います！
予選では対戦相手を空中に吹き飛ばすという離れ業をやったのけましたー！』

ナギの場合、注目されてなんぼなのでものすごく活き活きしている。観客からもキヤーキヤー

言われている。主におんにやの子から。

『続いての入場は犬塚 犬選手。犬塚選手は麻帆良大学の在校生で、何でも獣犬法の使い手とか。』

予選でもそれを用いて戦ったらしいのですが、なにぶん私ナギ選手に見とれ・・・ゴホン、

少々余所見をしておりますて目にしていなかったのでなんとも言えません。』

おい、司会。今、見とれてたって言いかけただろ？司会しろ・・・。対戦相手が怒ってんぞ？

『さあ、それでは気を取り直して、第1回戦・・・はじめ！』

合図と同時に対戦相手が4足歩行でナギに迫った。正直言つてめちやくちやキメエ。

ナギも若干引いているらしく、顔が引きつっている。そして、犬のようにナギに飛び掛った。

ここからでは顔が良く見えないが、あのブルドックのような顔で迫られたら夢に出そつだ・・・。

「う、うわあああ！！！」

「うべらば！？」

ナギの気合の掛け声ならぬ悲鳴と共に右拳が相手の顔面に突き刺さる。

今までで1番の拳速だったと思う。しかし悲鳴もキメエ。

訳の分からん悲鳴と共に吹き飛ばされ、舞台をすべっていく相手。ピクピクしていたので

気絶したんだろう。

『これは文句なし！犬塚選手気絶しております！第1試合、勝者ナギ選手！！』

1発KOなだけあって観客もかなり盛り上がっている。

（ナノ、ナノ！！）

客が盛り上がっている中ナギが念話をしてきた。

（どうした？なんか合ったのか？）

（相手が飛び掛ってきたときの顔が怖かったんだよ！！危うくトラウマになるところだったぜ！）

それほど恐ろしいものだったのか……。恐るべし獣犬法。

1 試合目の印象が強かったのか、次の試合は少ししか盛り上がりなかった。

ナギの2 試合目も1 試合目で学んだのか、始まってから一瞬で片がついた。

対戦相手の3 D 柔術というのが気になったが、こればかりは仕方が無い。よほど獣犬法が

怖かったと見える。そしてついに、

『さあ、とうとうやってまいりました！まほら武道会決勝戦です！』

決勝になった。相手はどうやら合気道を嗜んでいるようで、これまでの試合は相手を

受け流すのみで戦っていた。もっとも受け流して頭から落としてはいたが・・・。

『さあ、泣いても笑ってもこれが最後の試合です。両者とも準備はよろしいですか？

それでは決勝戦・・・・・・はじめ！！！！』

合図と同時にナギが勢い良く地面を踏み込み殴りかかる。

「おつらああああ！！！」

「ふっ、見えている。」

結構な拳速だったと思うが、見事に受け流されバランスを崩すナギ。

「おほ、すっげえ〜。今、ひょいってなったぞ!？」

なぜか投げられてテンションがあがっているナギ。ホント、元気な子だねえ・・・。

それから数回、殴りかかり受け流されるのを繰り返す。今までで1番試合らしい試合だ。

「へっ、面白れえ。行くぜ!！」

ナギのちよっぴり本気の瞬動で背後に回る。相手は辛うじて反応し後ろに集中するが、

すでにナギの姿はなく。もとの正面に居た。

「終わりだ!！」

ナギの蹴りが脇腹にめり込み、吹き飛ぶ相手。ようやく終わりのようだ。

『強烈なキックが決まったああ!!!どうやら気絶しているようなので、

まほら武道会優勝はナギ・スプリングフィールド選手だああ!!!!』

地鳴りのような歓声を浴び、舞台中央で両手を挙げるナギ。

はてさて、優勝賞金はいくらだったかね……。そんなことを思いながら軽く拍手を送った。

7話 ここが本場か……。あ、イルカが歩いてる。(前書き)

ようやく更新。時間が掛かった割に内容は薄いです。

インスピレーションが……。

脳内世界が滞っていい文が書けません。

7話 ここが本場か……。あ、イルカが歩いてる。

まほら武道会優勝者賞金100万円！！

少し前まで学園長にたかる金食い虫だったのに、成長したもんだ。
その金は大半は旅費に

残りは学園祭で使うことにした。当然ナギは渋ったが、首にナノス
ライサーを突きつけて

黙らせた。金があるからといって、その後の学園祭で何か変わった
なんてことは無い。

食べるものが少し増えたぐらいだろうか？

そして、残りの学園祭も存分に楽しみ（主にナギが）俺達は麻帆良
を後にすることにした。

「で、今度は何処に行くんだ？アメリカでも行くのか？」

「いや、今度は魔法世界に行こうと思う。」
△ソドウス・マギクス

「魔法世界に？なんでまた。」
△ソドウス・マギクス

「そこならもつと強えやつも居るだろうし、NGOの悠久の風の本
部にも行ってみてえ。」
AAA

後半は分からんでもないが、前半は戦闘^{バトル}狂か・・・。

「べつに、ナギが決めたんならいいよ。俺は行きたいとこ特に無いし。」

「じゃあ決まりだな。金もあるし、ゆっくり行こうぜ?」

「それは賛成だけど、パスポートのこととか考えてんのか?」

「あ・・・。。。」

どうやらまったく考えていなかったらしいな。

「どうせ考えてないだろうと思って学園長に頼んどいたよ。偽造だけど・・・。」

「サンキュー!!・・・って偽造かよ!?!」

「しかたねえだろ?2、3日で出来るわけねえんだから。魔法と併用してるからばれる事はねえよ。」

「ま、いいか。せつかく出来たんだしな。」

「そう言うことだ。で、何処のゲート使うんだ?」

「んー、ウェールズのは行きたくねえからほかのだな。イスタンプールとかでいいんじゃない?」

「ならそこでいいだろ。」

「そうだな。しゃ！！今行くぜ！魔法世界！！！」
△ンドウス・マギクス

「はいはい。」

いつでも元氣全開のナギに呆れながらも俺達はイスタンプールに戻った。

はてさて、途中なんのトラブルもなくイスタンプール経由の魔法世界△ンドウス・マギクスに付いたわけだが。

ウェールズからなら直でメガロメセンブリアに行けたんだが、どうやら帝国側のヘラスに来たらしい。

「おお〜、ネコにトラにトカゲ、イルカまでいるぞ！！」

「確かに帝国なだけあって亜人ばかりだな。」

トカゲならギリギリ分かるけど、イルカってどうなんだ？息できるのかな？

「まあ、とにかく。まずは連合のメガロメセンブリアに行かないとな。」

「悠久AAAの風ってそこにあるのか？」

「・・・知らないで、行こうとしてたのか？」

「おう！」

胸を張って言われても困るけど、ナギらしいっちゃナギらしい。

「で、どうする？船に乗って行くか、徒歩で大自然を抜けるか。」

「徒歩で大自然！！！」

「ま、そういうと思ったよ。」

予想通りのナギの反応に苦笑いしつつ、ナギをつれて街の外に出ることにした。

街の外に出てまだ10分。周りはすでに森の中。

「帝国は自然が多いなあ。結構気に入ったかも。」

「・・・。。。」

「？どうしたナギ。さっきから黙ってばっかだけど。」

「・・・ヒマだ。」

「は？」

急に何を言い出したんだこの少年は。

「ヒマなんだよ〜！〜！街を出てから森ばっかでなにもねえじゃねえか！〜！」

「・・・まだ街を出てから10分しかたつてねえだろ。」

「だってよ〜、普通は街から出たらモンスターが出てくるもんだろ！？」

「・・・それなんてRPGだよ。つか、何で知ってる。」

「なわけねえだろ。そんなことになってたら安心して生活できねえよ。」

「でもよ〜。△ンドウス・マギクス魔法世界に来たんだからドラゴンとかドラゴンとかよ〜。」

どんだけドラゴン会いたいねん。

「そんなに会いたきゃ、龍山山脈にでも行って来い。たぶん腐るほどいるぞ。」

「それってどこにある！！？」

俺の少しあきれたような声に全力で反応してくるナギ。・・・藪へびったきがするよ。

「・・・街で手に入れた地図に書いてあったぞ。連合の端のほうに名前の通りの場所だろ。」

「龍山山脈・・・・・・・・。」

何か考えるようにつぶやくナギ少年。・・・これはあきらめるしかねえな。

「・・・・・・・・シャア！！行くぜ！龍山山脈！！！」

「・・・一応聞くけど、悠久^{AAA}の風本部はいいのか？」

「んなもんいつでも行けんだろゝが！！！」

龍山山脈もいつでも行けることはつつこんだら負けなんだろう・・・。

「そうと決まれば一気に行くぜ！！燃えてきたああゝ！！！！待つてろドラゴン！！！」

そう叫んでナギは全力全開で走り出した。

「ああゝ、テキトーに進んでも絶対つかねえぞ。」

そんな俺の呟きは今のナギには届かないだろう。・・・まったくそこらの子供より手が掛かる。

ため息とともに仕方なしに暴走列車ナギを追いかけた。

7話 ここが本場か……。あ、イルカが歩いてる。（後書き）

次は龍山山脈ですね。

原作ではまったく出てこなかったですけど、名前通りの場所だと思います。

適当に龍を狩りつつ、連合に向かいます。そろそろ詠春とかアルと出したいです。

8話 痛っ！??うお！やめろ、**留るな！！**（前書き）

少々時間が開いてしまいました。
龍山山脈です。

とりあえずドラゴン出します。

8話 痛っ！？うお！やめろ、醫るな！！

ナギの突然の思い付きにより、メガロメセンブリア行きを後回しにして龍山山脈に行くことになった。

正直、何処に行こうが問題ないがかなり不安だ。いつナギが暴走するかかわったもんじゃない。

2人旅なので必然的に止めるのは俺しかないわけで……。

はあ、面倒だ。

そして俺たちはヘラス帝国からまっすぐ北へ向かい、ボレアリス海峡を渡り龍山山脈に到着した。

「うひょ～～！！たっけえ～なあ～～。」

「やっと着いたか。いい加減疲れた……。」

若干げんなりしている俺の隣でナギが山脈の頂上を見上げている。

頂上は雲に隠れていてほとんど見えない。途中にも霧が掛かっているようではんやりとしか

全体が見えないが、かなり大きな山脈のようだ。

「おっしゃー!!早く上ろうぜ!?!」

「・・・お前はいつでも元気だよなあ・・・。」

「おい、そんなにテンション低くしてどうしたあ?」

「どうしたもなにも、俺はお前の面倒をみて疲れたんだよ!!」

ここに来るまでの間、何度も野宿をしたわけだが・・・準備をしていたのは基本俺だった。

ナギに任せると周囲が大変なことになるのは魔法世界に来る前に体験済みだ。

もちろん食事の準備も俺。ナギは切ることと焼くことしかできない。

「怒鳴ることねえだろ・・・。確かにナノが居てくれて助かったけどよ・・・。」

「・・・はあ。ホントにしょうがないっか、なんっか。

「まったく、少しはしっかりしてくれよ?」

「おう!!」

「ホント、返事だけは立派だよ。で、早速上るんだろ?」

「おう!魔法世界のドラゴン相手に修行するぜ!!」

「そのためにはまず呪文詠唱を覚えなとな。」

「うぐっ!？」

凶星を突かれて目を逸らすナギに苦笑いしつつ、俺たちの龍山山脈での修行が始まった。

ケース1 魔法障壁を張っているドラゴンの場合

「G a a a a a ! ! ! ! !」

「うつせえな!くらえ!雷の精霊55柱 集い来りて 敵を射て魔法の射手 連弾 雷の55矢!！」

ナギが魔法の射手をドラゴンに向かって放つ。が、それはドラゴンの魔法障壁によって

弾かれてしまう。

「なんだ!？こいつ、障壁張ってやがる!！」

「ちっ！ナギ！俺が障壁破るからその間に魔法ぶっ放せ！！」

「了解！！」

「行くぜ！変身、クロー。」
トランス

両手の指を20cmくらいの刃に変え、ドラゴンに肉薄する。

「G y a a a a a ! !」

「邪魔な、障壁、だな！！」

右手で切り上げ、障壁を裂く。

「おっしや！今だぁ~~~~！！来れ 虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧
！！」

俺が障壁を破った後すぐにナギが得意の雷の斧でドラゴンを両断。

ドラゴンは帯電しながら絶命した。

ケース2 小型ドラゴンが大量発生した場合

「Gya、Gya。」

「Gyaaa!」

「だああああ!...!多すぎるんだよ...!」

「喋つてないで、手を、動かせえ!」

尋常じゃないくらいの数の小型ドラゴンが俺たちの周囲を取り囲んでいた。

一体一体の強さはそれほどでもないが、いかんせん数が尋常じゃない。

「変身、^{トランス}ブレード、スライサー!」

両手を剣に髪を二本の刃に変え、迫ってくるドラゴンを刻んでいく。

「くつ、来れ雷精 風の精 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐
おらあ!雷の暴風!」

ナギの放った雷の暴風が射線上にいたドラゴンを蹴散らす。

しかし、射線外にいた奴らが技後硬直のナギに飛び掛る。

「殺らせねえっての!」

スライサーを伸ばし、ナギに近づいたドラゴンを真っ二つにする。

「すまねえ、助かった!!」

「あんま、大技使うな!後が怖え。」

「分あったよ!・・・なら、来れ 虚空の雷 薙ぎ払え これでど
うだあ!雷の斧!!」

ナギが雷の斧を横に振りぬぎ、周りのドラゴンを一掃する。

「おお、思いつきでやったけどうまくいったな。」

「・・・たまに、お前の戦闘センスが恐ろしいよ。」

ナギの抜群の戦闘センスに冷や汗が流れた。

ケース3 ワイバーンとナギがタイマンした場合

「G y a a a a a ! ! !」

「くっ!?!だりやああ!!」

今回は俺はお休み。ナギとバカでかいワイバーンがタイマンしてま
す。

ナギが殴り、ワイバーンが尻尾を振るう。多少苦戦しているみたいだ。

「光の精霊１９９柱 集い来りて 敵を射て 魔法の射手 連弾
光の１９９矢！！」

「G r u u u、G y a a a a！！」

ナギの魔法の射手に対してワイバーンは炎のプレス。大半は相殺できず、その身に受ける。

巨大な体躯が魔法の射手の衝撃でよろめく。

「スキありい！！魔法の射手 集束 雷の１１矢！」

「G y a a！！？」

ナギが拳に乗せて雷の矢を打ち込む。ワイバーンは雷属性により体が痺れ、大きな隙ができる。

「しゃくくく！！来れ 虚空の雷 薙ぎ払え これで終わりだあああ
！雷の斧！！！！」

最後に雷の斧を決め、ワイバーンは巨大な体躯を地面に沈めた。

ケース４ 火竜と俺がタイマンした場合（魔法縛り）

「トレス トライ イル トランス 来れ氷精 大気に満ちよ 白
夜の国の

凍土と氷河を こおる大地！」

「G r u u、G a a a a ! !」

俺の放ったこおる大地を炎のプレスであっさり相殺される。

「何やってんだナノ」。攻撃全然通ってねえぞ」。

・・・ナギのヤジは無視しよう。それにしても、

「魔法オンリーは、結構、キツイ、ぞ！百の影槍！」

飛び掛ってくる火竜を影でできた槍で攻撃する。多少傷は付くものの、致命傷には至らない。

「ああもつ。何でこんなに硬いんだよ！」

「どうした」。変わってもいいぞ」。

「ハッ！冗談。」

ナギのヤジに返答しつつも動きは止めない。火竜の周囲を瞬動で動き回る。

「・・・・・・・・やつと、完成だ！捕縛結界発動！！」

動き回りつつ描いていた魔法陣を発動させ、火竜を縛り付ける。

「トレス トライ イル トランス 契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ

とこしえのやみ えいえんのひょうが こおるせかい！！」

捕縛結界ごと火竜を氷漬けにしてようやく終わる。

「・・・・・・・・寒っ。」

目の前に氷漬けの火竜があるとなんり寒い。

ナギと龍山山脈で修行を始めてからかなり日にちが経った。いい加減ドラゴンの肉は食い飽きた。

「で、ナギ。いったいいつまでここにいるんだ？」

「ん〜、そうだなあ……。けっこう時間も経ったしなあ。そろそろメガロに行くかなあ。」

「なら、さっさと行こうぜ。いい加減服がボロボロだ。」

トランス
変身の応用である程度服の修理をしてはいるもののさすがに限度がある。

大小いろんな攻撃をくらったから修復するのも一苦労だ。

ちなみに怪我をしたときの治療は俺のナノマシンを使っている。俺は勝手に治るが、

ナギにはナノマシンで治療しつつ、回復魔法を使っている。おかげでそれなりに上達した。

「だなあ。んじゃ、修行は終わりにしてメガロに行くか。」

「だな。久々にまともな飯が・・・、あれは。」

体を解しつつ街に着いたときのことを考えていると、視界の端に楕円形の物体が見えた。

その物体のところに向かうと、

「・・・これは、火竜の卵かな？」

「なんだなんだ？卵か？」

「みたいだな。親がいなくてところを見ると、やられたみたいだな。」

運良く無事だったんだろう。なかなか運のいい奴だ。

「どうすんだそれ？」

「どうも……どうじようっ。」

卵の扱いに困っていると、急に卵に罅が入る。次第に罅が広がっていき、

「K y a a a !」

「……………」

「おお！卵が孵ったな。」

卵が孵り、中から真紅の鱗をした火竜が出てきた。

「K y u u u ?」

卵から出た頭をキョロキョロさせ、やがて俺に視線を固定させる。

「……………」

「……………」

無言で見詰め合う俺と火竜。さすがに沈黙が痛いので卵を片手で支え、

もう片方で頭を撫でようと手を伸ばす。火竜もその手をジッと見つめる。

徐々に近づく手と頭。そして、

カプッ
♪

噛み付かれた。

「痛つてええ！！！」

「だっせー！噛まれてやんの！」

生まれたてとはいえやっぱりドラゴン。噛まれればそれなりに痛い。
離れさせようと

噛まれた腕を振る。そうすると、卵から全身が出る。真紅の体躯が
露わになる。

「はーなーせー。」

「ハハハハハ！！！」

腕を振り回す俺、爆笑するナギ、喰らい付く火竜。・・・なんて力
オスだ。

ある程度、振り回しているとようやく火竜が手から離れる。

ぽんとう宙に飛んで行き、翼を広げて旋回。生まれてすぐ飛べるとは、なかなかの奴だ。

そして、パタパタとこちらに飛んできて、

「Kukyu!」

俺の頭に鎮座。

「……………どうしろと?」

「そのまま連れてけばいいんじゃない?なんか懐いてるみたいだし。」

「でもなあ……………」

頭から退かそうと手を伸ばすと、

カプツ♪

「痛えよ。」

齧られる……………はあ、しゃあないか。

「連れて行くしかないみたいだな。」

「だな。」

…………名前決めないとだめだよな。何にしよう……………。

「・・・レンオアムだな。今日からお前はレンオアムだ。」

「ふん、まあまあだな。俺の考えたドラカジリには負けるな!」

「・・・何だそれ?」

「ん?ドラゴンでめっちゃ齧ってたからドラカジリだ!」

ネーミング無いなあ・・・。ってレンオアム?俺の頭を齧るな。地味に痛いから・・・。

こうして新しい旅の仲間とナギのネーミングセンスの無さが発覚した。

早く街に行つてうまいもの食いたいぜ・・・。なんて現実逃避してみたり・・・。

・・・レンオアムさん?いい加減齧るのやめてもらえます?血が出てきたし・・・。

8話 痛っ!??うお!やめろ、留るな!!(後書き)

戦闘描写ってむずかしいな・・・。

戦闘中だと主人公が熱いです。

主人公の始動キーが決まりました。適当にそれっぽい感じで決めってみました。

ナギの始動キーが分からないので省略しました。

そろそろ詠春とかアルとか出したいけどタイミングが・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4460q/>

魔法先生ネギま！～トランスって懂れるよね～

2011年3月7日04時27分発行